# 東北地方のアイヌ語地名の復元

鏡　味　明　克

## 1　はじめに

本稿は，アイヌ語地名の痕跡を考証する連続論考の一環であり，先回の「東北地方のアイヌ語地名の痕跡」（本誌22号，2007）の考証の方法を継続するものである。

22号論文では，フレ（赤），アシリ（新しい），フシコ（古い）の3語を継承する地名を指摘して，その変化を論じた。この問題のために採り上げるべき地名型としては，先先回の「アイヌ語地名の痕跡化」（本誌21号，2006）において，「アイヌ語の基本地名でありながら，従来東北地方において見出されなかった地名の探索」というテーマについて，ピリカ，フシコ，アシリ，ホロカ，クッチャロ，ペンケ・パンケ，ヌタプ，エンルム，ヌプリ，ピパ，コタン，フレの13語を設定した。そのうち，コタンについては，早く本誌18号の「アイヌ語地名の日本語接触変化」（2003）で考察してあった。ペンケ・パンケとエンルムについては21号で，フレ，アシリ，フシコについては上記のように，22号で考証を行った。残るはピリカ（美しい），ホロカ（後戻りする），ヌタプ（川曲がりの袋地），ヌプリ（山），ピパ（烏貝）の5語である。この5語を今回の考証の対象とする。

## 2　アイヌ語ピリカ（美しい）の痕跡の調査

北海道のピリカ地名は，川の水がきれいである場合に主に命名されている。たとえば，ピリカ富良野川（上富良野町）は富良野川の支流の水質のよい川に名づけられている。漢字をあてた例では，美利河（ぴりか・今金町）は利別川上流，ピリカベツ川による。

このように，「類音類義」で，「美」の字があてられていく方向で，東北地方のつながりのある可能性が考えられる地名をみていく。まず，ピリカの語形の直接変化としての「びりか」などは見出されない。「美」の字が書かれていて，かつアイヌ語地名に多い河川地名からのナイまたはその痕跡を有するものに，痕跡の可能性が考えられる。図1の，岩手県下閉伊郡岩泉町門の見内（みない）は「美」の字ではないが，「内」のナイの読みで，かつ図のように河川地名に発しているから，ピリカナイに起源をもち，「美」

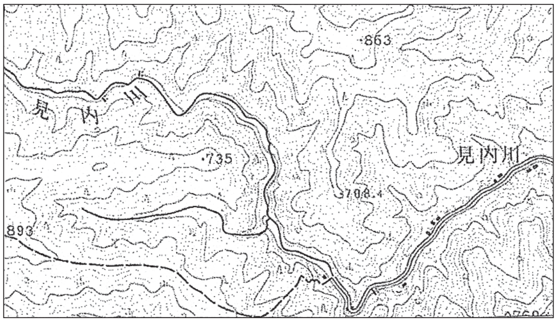


図１　見内（みない）

国土地理院発行の５万分１地形図「門」（平成14年修正）を使用したものである。

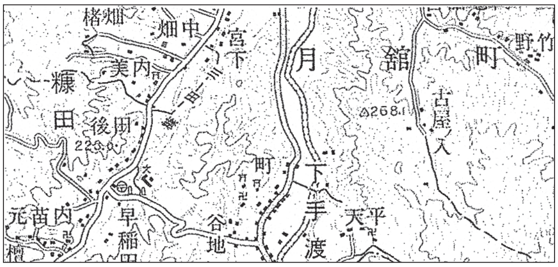


図２　美内（びうち）

国土地理院発行の５万分１地形図「保原」（昭和60年修正・平成６年要部修正）を使用したものである。

の字が同音訓の「見」に書き換わった可能性がある。図２の福島県伊達市月舘町糠田の美内（びうち）は「美」の字があり，「内」は「うち」と訓読しているので，まずプラスマイナス「見内」と同程度の可能性であろうか。図のように，ここも川沿いの地名である。そのほかに，同じ福島県に，東白川郡古殿町大字松川の小字に美沢（みさわ）の小字名があるが，この地名は地形図上に記載がなかったので，ここでは図示できない。

## ３　ホロカ（後戻り）の痕跡

アイヌ語のホロカは川が「後戻りする」の意である。この地名は地形上，河流が一定区間逆方向やそれに近い流路をとる場合にいう。日本語でも「逆川」（さかさがわ）という名称は各地にある。アイヌ語地名の典型的な例は，図３の幌加内（ほろかない）である。幌加内川は図のように，北流してから西に折れて南流する雨竜川に注ぐ。

東北地方では，ホロカそのままの語形では遺存は認められない。ただし，ホロカと発音の近い「ほろ」がアイヌ語のポロ（大きい）の地名を多く伝承しているので，その地

図 3　幌加内（ほろかない）

国土地理院発行の 5 万分 1 地形図「鷹泊」（平成 8 年編集）を使用したものである。

名にまぎれて，「大きい」のポロが語源ではなく，ホロカの地名が混同されて「ほろ」になった例がないかの可能性をさぐることにする。青森県の山地では，「後戻りする河谷」はいくつも認められ，日本語地名の「逆川」も 2 例ある。図 3 の青森市の例，図 4 の西津軽郡の例，いずれも逆川山，逆川岳の山名にもなり，逆川の河谷ははげしく屈折している。これらの近傍で，図 4 の奥入瀬川の支流の「大幌内川」と「小幌内川」に注目してみた。一見，典型的なポロナイ（大川・本流）の地名であるが，実は，ポロナイが 2 本並走して，かつ本流の奥入瀬川に入るのは奇異であり，かつポロナイに大小をつけるという名づけ方も不審である。もし，この 2 支流が，本来はホロカ・ナイ（後戻りする川）で，その大小があって，その大きい方が，ポロ・ホロカナイならば納得できる。

ポロとホロカの日本語化の過程での混乱から，ホロカナイ川が「幌内」川と混同された可能性があるのではなかろうか。

図４　逆川（さかさがわ）

国土地理院発行の５万分１地形図「八甲田山」（平成18年要部修正）を使用したものである。

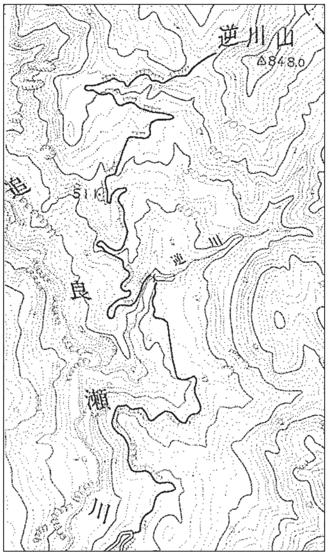


図５　逆川（さかさがわ）

国土地理院発行の５万分１地形図「川原平」（昭和61年修正）を使用したものである。

図６　大幌内川（おおほろないがわ）

国土地理院発行の５万分１地形図「八甲田山」（平成18年要部修正）を使用したものである。

## 4　ヌタプ（川曲がりの袋地）の痕跡

アイヌ語で川曲がりの袋状のところをヌタプというが，北海道でも図 7 の新篠津村の袋達布（ふくろたっぷ）は，石狩川の湾曲部で，ヌタプが変化してタップになり，日本語の「袋」と結合している。東北地方ではヌタプという原形は確認できないが，この「袋達布」は日本語化をたどる上でかなり参考になりそうである。東北地方には「沼袋」の地名が各地にあり，沼が袋状ではなくて，川沿いの土地が袋状になっているという共通性がある。よみはすべて「ぬまぶくろ」であるが，ヌタプとの関係でみれば，「沼」は「ぬ」，「袋」は「タイ」と音読できるから，「沼袋」は本来ヌタプの「ぬ」「た」にあてて，袋の字で川の屈曲を表したのかもしれない。

東北地方の例としては，まず，図 8 の岩手県九戸郡山形村大字川井の沼袋，図 9 の同下閉伊郡田野畑村の沼袋，どちらも沼はなくて，川沿いの屈曲部に位置する。

以下，同様の川沿いの立地で，宮城県色麻町，栗原市栗駒町，福島県福島市松川，伊達郡桑折町，白河市（旧東村）などに川沿いや旧河川敷に「沼袋」が認められる。

地域は変わるが，東京都中野区の沼袋なども妙正寺川の屈曲部にあり，川はあっても沼はないことは，ここに引いた東北地方の沼袋と共通する。

なお，宮城県大崎市田尻の沼部（ぬまべ）やいわき市沼部なども，あるいはヌタプにあてた「部」のプからのよみかえかもしれない。

## 5　ヌプリ（山）の痕跡

ヌプリもこの語形のままでは，東北地方に見出せない。「山」を表す基本中の基本語であるが，どのように消失したのだろうか。北海道の地名では，山名のヌプリはかな書きされることもあったが，歌登山（うたのぼりやま），大登山（おおのぼりやま）などのように，山の連想で「登る」の語があてられているものもある。しかし，東北地方ではこのような「―登山」を見出さない。峠の名では，福島県の浪江町と葛尾村の境に登館（のぼりたて）峠の名があるが，関係の有無は不明である。

むしろ，可能性を考えるべきは，東北地方に顕著にみられる山名接尾語の「―森」であろう。この語は全国分布の中で四国の「―森」とともに古い周圏分布を示すが，この山名を表す古い日本語の接尾語とアイヌ語の基本語ヌプリとは当然接触し，併用された歴史があるはずである。あるいは，ヌプリを持つ地名はこの「森」の字をあてられて，その分布の中へ組み込まれてしまったのであろうか。接尾語「森」のうち，「ノ森」の構造を持つものがややめだつのは，あるいは「ヌプリ」からの「ノモリ」のものも含まれる可能性があるのかもしれない。青森県に乱岩（らんがん）ノ森，ドコノ森，飯（い）ノ森山，岩手県に鳥古（とりこ）ノ森，秋田県に湯ノ森（ 2 例），菰ノ森，駒頭（こまかしら）ノ森，東ノ森，西ノ森，宮城県に沼ノ森，中ノ森，山形県に中ノ森山，

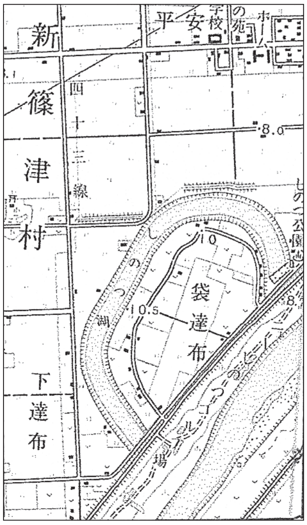


図７　袋達布（ふくろたっぷ）

国土地理院発行の５万分１地形図「当別」（平成８年修正）を使用したものである。

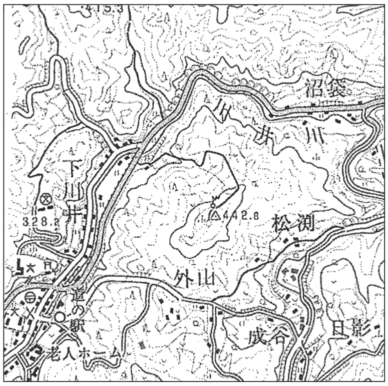


図８　沼袋（ぬまぶくろ）

国土地理院発行の５万分１地形図「陸中関」（平成14年要部修正）を使用したものである。

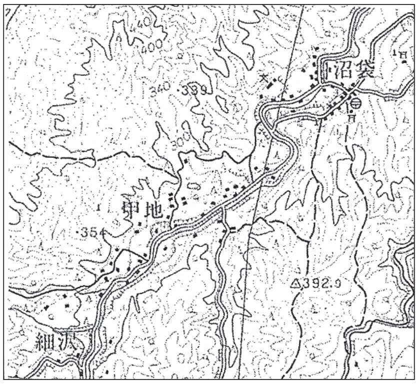


図９　沼袋（ぬまぶくろ）

国土地理院発行の５万分１地形図「岩泉」（平成14年要部修正）を使用したものである。

福島県に中ノ森山などである。

なお，アイヌ語にはもう一つ，シリで表わしたマチネシリ（女山），ピンネシリ（男山）などの山名がある。このシリを接尾語にした山名も東北地方で見つからない。尻高森（青森県）などの非接尾語の用法のみであり，これは後（しり）高山（石川県）などと同じ意味である。雌岳（めだけ）・雄岳（おだけ）（釜石市），雌長子内岳（めちょうしないだけ）・雄長子内岳（おちょうしないだけ）（湯沢市）などの対地名はある。

## 6　ピパ（烏貝）の痕跡

北海道では美唄市の語源になっている，カラスガイの多いところ（ピパ・オイ）のピパである。美唄の名ももとは「沼貝村」と意訳していた。秋田県能代市の近郊に見られる比八田（ひはた）（図10の右上）が同じ語源ではないかと見る。「八田」は畑とも考えられるが，ほとんど水田地帯であること，「ひはった」とも言うとのこと（『角川日本地名大辞典　秋田県』）から，「ピパのいる田」（タは日本語）と解する。この近く，5

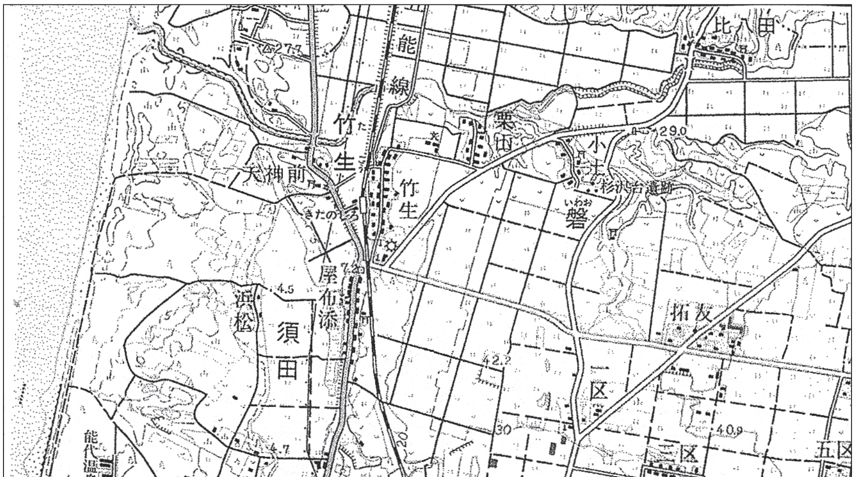


図10　比八田（ひはた）　荷八田（にはた）

国土地理院発行の5万分1地形図「能代」（平成4年修正）を使用したものである。

キロほど南にも「荷八田」の集落がある（図の右下）。ここも「にはった」というそうである。もし，比八田と同語源ならば，語頭音を pi>bi>mi>ni の変化と解釈すればよかろう。

## 7　ま と め

今回，残った課題の 5 語を検証したが，ピリカは「美」「見」の字に置き換わっていった可能性がある程度考えられよう。ホロカの痕跡はいくつもは見つかっていないが，取り上げた「大幌内川」の例は注目できるのではなかろうか。ヌタプと沼袋との脈絡は，かなりありそうに思われ，例も多い。ヌプリの確実な遺存例は見つかっていないが，東北地方の「―森」の濃い分布の中での可能性を参考までに考えてみた。ピパも多くの例をあげていないので，可能性の提示にとどまる。

以上，アイヌ語の痕跡の確認とその復元をいくつかの地名型について取り上げたが，可能性の提案にとどまることばかりである。今後も，比較する地名例を多くしたり，まだ取り上げていないアイヌ語の地名型を増やしたりして，日本語化した地名の復元の考察を続けていきたいと思っている。

### 引用文献

『角川日本地名大辞典　秋田県』（1980年）角川書店
鏡味明克（2003年）「アイヌ語地名の日本語接触変化」『人間文化』18号
鏡味明克（2006年）「アイヌ語地名の痕跡化」『人間文化』21号
鏡味明克（2007年）「東北地方のアイヌ語地名の痕跡」『人間文化』22号

### 参考文献

山田秀三（1957年）『東北と北海道のアイヌ語地名考』楡書房
青森放送（1963年）『青森県地名辞典』
NHK 北海道本部（1975年）『北海道地名誌』北海教育評論社
山田秀三（1984年）『北海道の地名』北海道新聞社
国土地理院（1991年）『20万分 1 地形図基準　自然地名集』
西鶴定嘉（1995年）『東北六県アイヌ語地名辞典』国書刊行会